



^ 13  
3111  
1



~13  
3111  
1-5

南里亭主人志

ひーかきり

打ちの濱

五卷

浅山あー園画



南里亭

梅はさぐれまゝにえ絶えて

花のあはれあはれしむるは

近は海はあはれあはれ物のやまゝ

るる蔵はあはれあはれあはれあはれ

るるあはれあはれ友人南里亭主人志

南里亭主人志

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

門へ 13  
3111  
巻 1

語を先まず一ひと書辭し宋榮堂そうじやうより人傳ひとでんよ  
あつて是これをかんじつあづま梓あづまふ冬ふゆ入いれる  
ハルヤ文ぶんの懸けん縮しゆくふたねを思おもひ重かさし  
はるまゝの浪なみ速はや人の歌うた弄ろうに  
傳つたへ事ことはなれぬ中なかの心こころをみよと教おしへ  
ゆゑに書辭しを止とどめて不や止まり  
なるといふ思おもひ女むすめの浮うきかへり

川原  
州  
南

善ぜん念ねん報ほうに東あづまの心こころを  
かきしつゝなるをやがた  
木きよゑつてふふさかへり  
しつゝなるをやがた  
端はなの心こころを  
文化ぶんか中ちゆう五ごの心こころ  
かきしつゝなるをやがた  
浪なみ真ま江え南なん漁り夫ふ  
野の産うみ

和  
三



平田松竜軒  
実名 菴原松之進

草菴集  
お出の源  
お出の源



湖西社江士  
北良松蝶八

直井の渡家  
お出の源  
お出の源

お出の源 巻之一

お出の源



沙門忍頂俗称  
安西信孝

万葉拾

あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ



室の津持女  
官城太夫

人買售吉

あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ



濃州竹分鼻  
農夫忠六

乳母小夜



史州  
山之那や  
うらやま  
はまのたね  
さくらん  
あはれ

鳥飼橋二  
今川家浪人  
実名  
正木貞造

惣りく緑	
發端	虚空花會
一回	雪中の海棠
二回	微笑の山梅
三回	赤糸紅の梅
四回	深谷の桃花
五回	風ふ散心吹
六回	根ふ掃る花
七回	根束の饗麦
八回	咲ゆる芍薬
九回	夢の女郎花
十回	十寸穂の薔
十一回	籬の若草會
十二回	穂薔の紅咲
十三回	時雨のた豆
十四回	名州の赤梅
十五回	白梅の再開
十六回	燈非小散柳
十七回	紅夜の水仙
十八回	雪吹の井
十九回	滝水の新声
廿回	十年の雲

晝小説打出濱卷壹

發端

武江市隠 南里亭其樂著

今いひく一發端の右守今川修理左太夫氏親の家老朝日奈保中  
 守の家臣小直井正太夫とく緑三首石城知以しく軍学兵書の  
 師南とらめありりえ東井坂氏かしが性雙廉直ふれどく  
 主人保中ち直の一字を挿りく貴賢ふしりり一ゆ是と成  
 小冠りして直井と名宗一男一女子を設け男を正と物女は麻  
 野と呼見ハ十九才時年七才をいづれも異國よりくんがめ賢くは  
 れつる正太夫はこり小女房異味も研小可をがり夫婦が中小堂の  
 玉のどく大切小育りり此れ三月十三日城下の南ふりり當國山の虚空

藏の今日少くも納珍集一七糸袴足付小十三歳の児を名義給は  
 の勢直を授らんともく在る返も歩ゆて運び糸多人引もきしり  
 時きつ揚の花籃つふれは四方の山々遠見いふぢかりふ一ふち  
 夫も娘麻疋を付れく其の糸色とも見まほしき朝疾行厨  
 ふど用ゑしき下女奴僕と俣させ當目しき糸袴しきり  
 ひふ斯る會式ふれは若きも老きも若羅を飾りて出  
 ちぬる中小氏親の昵近衆四五紫打連く糸袴せしが一際目立  
 出さしは菴系ねく進とていす廿四葉の仕黒羽二重の小袖小ね美  
 色の羽織小襦の紋縫付しを着し朱鞘の大小内がし。二本貞造とい  
 るも何と幸格好ぶるが納戸の小袖小黒羽二重のね美井筒の紋付する

服柄を着し柔和の拵大小もおまゝやうふさしあつて。その外は  
 美服を着し端唄小謡思ひく小口とささく。河原川の料理屋よ  
 り出来るふちまといふ小あり先小わり並来多麻疋が美しき  
 をえとねをを初矢はく小當こそうけ戯れをいひ貞造を  
 其中にも言語おく流人の余う小戯言とるを止る中う小言ふ  
 ふちまの婦人ばきき音のどくるる振なり。金糸ねく進を  
 近れらち小性頭菴原大寺といふ人の婿子ふく親のなま  
 小我候のことも多く今序貞造が羽袴の色美くね  
 其が名小お存きしき暫時借用中きし其愛りそれ  
 羽袴を足下小貸中せしと云理小若かさを貞造否とせ



聖の通り着かすより、眞遠が父を心未孝候とて、代々今川家  
小治で馬術有職の所、花事、陣小眞遠ハ物産、争ひ、者也  
氏親秘蔵の末船の小舟を眞遠不許け、伺し、められ、事多程の内  
まふ入おれども、是をわしも、慢せば、人小言、ぶらぶらして、争ふと  
ふく、争ふ、謙文、業和、温、吹の、ま、あり、程、ふく、城下小を付られ、バ  
各別れ、者、不、帰、り、り、系

第一回

両中の海棠

内慾の私、其身を博せ、る、と、宣成、哉、人の、身命を、忘る、る、り  
色、より、甚、く、愛、ふ、一、室、小、直、井、正、夫、夫、が、娘、麻、野、ハ、當、目、多、う、の、夜、より  
何、と、ふ、物、は、大、一、を、替、へ、と、一、て、元、重、く、繼、計、ハ、元、より、書、小、好、め、る

糸井の業を、一、廢、並、ら、れ、兩、親、の、業、ト、一、方、あ、ら、ば、是、全、く、悔、の、む、一  
ふ、と、免、と、今、川、家、小、秘、を、れ、る、赤、竜、丸、と、小、児、中、一、切、の、奇、業、は、り、  
是、を、中、へ、む、娘、小、吞、一、む、ゆ、多、日、あ、れ、も、あ、ら、ど、の、語、も、ふ、く、目、小  
ま、一、く、元、先、学、れ、疲、又、て、不、食、る、と、い、れ、ば、是、彼、と、医、所、を、換、え、  
服、茶、せ、一、む、小、毛、一、や、世、ふ、い、ふ、勞、疾、の、影、り、や、と、今、世、を、神、小、行、り  
佛、不、形、て、心、記、限、り、あ、う、り、一、ふ、い、ま、ま、の、替、り、一、ま、も、ふ、ら、れ、た  
母、の、吳、井、心、小、思、不、中、う、娘、麻、野、が、口、頃、の、病、解、初、ま、で、医、業、を、受、け、  
行、形、小、急、り、ふ、り、れ、ど、も、あ、む、う、り、の、使、元、も、又、一、び、ま、を、と、い、め、あ、ら、  
の、者、も、病、毒、と、い、ふ、と、い、降、く、け、れ、ど、も、一、や、物、怪、す、も、付、一、小、や、俗、  
説、ふ、い、狐、狸、の、影、が、入、れ、一、ゆ、り、や、ら、と、い、ふ、去、り、も、行、跡、加、持、い、と、い、

あければ疾苦のつる。まゝに寝て、いつまでも寝どもの中ふおの  
 居れども寤りて七もろれを其情動き、恋しかり、男子  
 ても出来しふや恋の病といふ支ふれ、も、うらみ是を娘小向  
 けくも、一被る男子もあらむ、夫小進め、婚調ふば支をむ  
 一づれ、嫁づく、あつとてもる、その習を、おせ、一、言の  
 初る、支り、中、母の、に、ず、一、向、一、志、て、自然、その、中、う、ある、こと、も  
 思ひ、も、一、づ、病、病、の、こ、る、も、と、さ、一、却、る、親、子、の、る、面、目、も、あ、れ、仕、合、  
 戯れ、る、母、と、思、い、ん、も、知、り、一、不、向、止、ふ、人、や、尋、く、知、る、だ、さ、や、老、や、せ、角、  
 や、せ、も、ド、一、ま、し、一、日、を、さ、し、一、ま、あ、る、病、病、を、う、り、れ、を、仮、令、娘、に、行、く、も、思、  
 心、ふ、思、ふ、一、を、打、め、く、人、と、恋、ひ、て、鬼、女、不、平、思、い、付、し、一、娘、を、育、  
 一

乳母の小夜をして是をぬきせふ、幸いの変彼は、病り、来、  
 有、こ、そ、産、竟、の、子、吸、な、り、と、ほ、く、も、愛、小、思、い、出、し、乳、母、を、別、不、  
 招、き、一、つ、一、五、十、の、推、多、を、流、り、も、娘、小、尋、同、く、れ、一、と、お、れ、  
 小、夜、も、た、右、の、掌、を、う、ら、く、実、子、を、入、る、支、親、小、如、り、の、さ、一、や、  
 義、う、い、い、一、が、台、傷、も、お、る、亦、忍、死、も、つ、づ、け、病、害、と、の、な、下、神、  
 佛、を、祈、り、せ、一、が、言、早、十、七、も、ぬ、玉、一、ま、し、一、思、い、あ、ま、か、の、  
 有、ま、し、一、ら、ふ、い、ん、私、一、と、小、尋、中、一、と、一、づ、れ、バ、母、大、小、娘、い、余、  
 人、と、違、い、い、ぬ、ふ、何、も、ん、あ、く、言、語、中、あ、れ、を、流、か、も、ふ、心、  
 一、づ、病、根、を、求、く、れ、一、と、お、れ、一、づ、れ、子、を、お、り、一、親、の、心、  
 一、事、も、か、し、ら、る、事、あ、く、あ、が、一、と、支、あ、り、一、乳、母、の、小、夜、を、  
 一

とすし行時も延引ぬぐし一は奈人小尋くその悪男小逢せ申  
 さんと幸念ふ麻野が病床小むり尋人とせーが幸くりのぐら  
 親の教ををちりむふ一打付小伺もく一肉也もけくさ武  
 花野の今日ふ申くぞ若者と言一むく一の仔細物語を取て  
 一ふ一六郎る徒抄のあもあろるや今の世小業平のどね是男の  
 一くけ申ふ悪性で、誰か思ひあやべ一は奈人よは母身からの  
 一病者く一はあ親様のは奈トハ大辨のと小はげ多のは医原方  
 小も又せむい一は是といふ病忘の見究一といふ事ふく加持祈  
 禱の終もあね由今六頼なき医業もいげ夫付言條が存するい  
 こそれどもは奈人に限り有まらば事ぶととくや幸はもあうむい

一ふれは自然い人をと思一は奈のあふ殿はてもねんといふ有まら  
 りの小もいげたも有るは余人一憑一あふべき事あれも乳母  
 おうちめくすせられいも何者かき。神小は兩親もい合後  
 縁付と尋む折るあれはあふ殿のねては乳母が中継く取持の  
 幸一は心小付申うに較一トド一又は兩親のあえ小申さばともい  
 奈人の慈一と思一は玉上殿はらぶ乳母が更合では逢せ申さん小打のむ  
 小向うけれ麻野は自試打あうく免さむ一物をも不考一が良けりて  
 破落と洞を誦しつ自らが病の根とふ乳母が推量の通りあは  
 母は母初め誰か尋る人ともなく。た有はとくはせうく言出る事あり  
 糸は糸思いを始のふく煩悶若月日越せ一ふは母言條の向ふふ

ぐわい一心を懸る端とぬくく打めく字ふば答候も定く徒りの  
 と思ひ笑久父母様の内耳ふ入ふハヤウー叱り玉りくも忘れなかりぬ  
 何れなる同縁もその方々毎の傍日まき一 夜ふ添く目先ふ有申う小  
 く心の通ひ止附ふしと涙さ一吸くを乳母ハ袖こそ母内の推量ふ遠く次  
 病根を穿出ーくくと夫お恨いたわんく存せし由取尋ふり世  
 小徒こそぞ一五いし。きりくその殿内ハ何方の殿方様ふ也又か申し  
 家中の方様も。とてりの事ふは名とせ下さるーと尋ね麻野を  
 何と押拭い自が思ふ人ハ何方の殿方もやその名苗字をせも初ら  
 るー其のふぬく當同多くの端緒ハ河津川の辺より始ふ先ふ連と  
 もふく並い来るハ五人の壮士流あり申ふき入抱静く威有て申あ

小入一世も希ふる民士有しゆ。珍る男子を物の本ふ画くくり  
 外小見くくるふもふく女とせれく嫁付りのあれば申申うふ殿達と  
 あそまふせば女の申ふあくと思ひし。もうあのも忘れ申す  
 て是を明白に書づれば人もふく終小思ひの病元とるうく両親ふ苦勞  
 をか帯一あそ不孝ふれえ子孫候ふ語り一上、かハ拘の巻も消一  
 病も怪らうにぬぬれ。棄トふせぞと台声さえも目曇り涙を止るのう  
 くれ小夜の二五十を軍終り女の男小宴慕とる事敢く徒との  
 一まき一男女の及人倫の秘ふれハ心事内両親ふ申ふば早速  
 辺を結び玉いづれとも肝心の名取をば好トふくてハ何方を  
 を重和人申もふ。勿論虚空花會小野後系治ふれば何れをま



思ひ當りし人や柳もも子そり小ぬさりの山をふくいと櫻小  
 首とわらひけれは麻時再び乳母小向いお小徳梅ふれども今日の  
 衣服小黒羽二重小ねふ井筒の紋付する服襦を石こそらそ一殿い  
 故小自が子おれもその人の紋を付垂心を懸けりしと見まるも  
 皆小女このまじ紋付するをんそ小夜火にねび是まをねある  
 沈撥ふれはは両親小内へそ其人尋糸しそ一上名高字をも  
 りの家柄をもも向う後親は中も中上は度更調い中へそ余  
 所ふうしけ紋の家を尋ねれ戒人ねふ井筒の紋亦も朝日奈の  
 家中小へん知れは眼辺魯津小姓頭菴原大寺様とそ五百石の  
 おれどもは没柄とそ高時の勢いもあつとふりのみれば乳母は是をば

て菴原様とそ常々香々屋晋七が出入のより一健が言一更を思ひ出  
 香々屋の来るを運し侍居り

牙 二 回

微笑の山梯

城下本通り小香々屋晋七とそ小系柄高しして屋舗方出入の  
 一がぬる直井の奥へおけまありし由え何は用ふとそ小香々屋  
 正々更が屋後へ来りりれば乳母の小夜は待兼し晋七との先けか  
 中の口は誘いおを直井へおけりおけり交りり屋はか入下さる  
 何おとそ晋七の親もも出入の私おおけりおの顔と作しを  
 ぶきいおれふくいと町人の儀ふはば身小意せぬは是些ふし  
 子細作下さるべしと言われは小夜は先改しは系糸のうを系糸が

一方の六ヶ敷の少もいづれ其えの事小言あり菴系様小若若と  
 有より年拾好男振出後何小言や下されし小言晋七まといせ  
 安きよ小言菴系の婿子ね進極は年廿二四あり脊拾好と男  
 人の目小物士待小當時細術の達人ぬきしきりなもあぬゆの何  
 ぞね進極一四用るにや馬定級にね系井筒ありといふ乳母、収赤  
 捺を進めその若くのことけ方の小菴人の悪人あり其くもの病音もえ  
 の後いふ少々當同まうの端流おね系いづれ級付る殿言を足初むい  
 何れの誰とふゆと知るすふく人も源く強いむい持と今  
 の病元あり各倅粗推重しとま痛根をひきしと本明内て言ひ  
 より其えの事を思ひ出し招きさう何卒そのね進極は菴人の玉章を

取次をいふ人や親とふはけきありといふを打けし是は極くぬゆの病音  
 偏出をを被おふくは出負下さるは極の病音やとと  
 ひども及ふとぬゆは定眼もふしねを出負下さるも身を平く絞  
 せびと不定ふとのるは何とて出出叶いしとやけき平の病音捨下さ  
 れるといふおぞ小夜今さるは極せり何とせんか被着し須更沈  
 吟し晋七どのき契といは思ひ玉も理るれども敷てなるぬと平りも言が  
 事しは奈人小言号の敷有といふもいづれ兼てより思ひ事の敷もつた  
 縁中入くしと両親様作られし不幸の菴系の若殿を感せし  
 直井が病音とあまの病音といふて面月を失事して毛を咬て病を

求久より久内まひやくよりひさうちとて始はじめを申まをのん入いれねば孫まごは心こころあふ表おもて向むかより縁えん  
 後の媒まへ合あひを頼たのむ肯うづ尾びより個この方かた誰たれも内うち談だんの取とりらるらを頼たのむ事ことい  
 晋しん七しちと我われ知しる人ひとのよゝあれど母はは親おやのあつて婚こゝろの悪わるを人ひと知しる事ことい  
 あれどとも乳うで母ははの音ね悔くをりて頼たのむるれど方かたふさえは下くだささるさる事ことい  
 表おもて向むかのは縁えん辺へあつたれども子こ孫まご物もの咄はなす事ことい  
 申まをのん由よし方かた申まをのん入いれと申まをのん袖そでをいひて申まをのん貞まこと孫まごうの由よし知しるれど何なに者ものか  
 ぞれ頼たのむ方かたは心こころあれど表おもて向むかより縁えん後あとを度たぎらぬ事ことい  
 是これより菴いん孫まご孫まごの密ひそか玉たま事ことい  
 して弟あにの夜よ事ことめりて微ひそかして申まをのん弟あに方かたもは夜よ事ことい  
 流ながる隠ひそ密ひそ客かくして人ひと知しるれどと約やく束むすして度たぎらぬ事ことい  
 申まをのん由よし方かた申まをのん入いれと申まをのん袖そでをいひて申まをのん貞まこと孫まごうの由よし知しるれど何なに者ものか  
 ぞれ頼たのむ方かたは心こころあれど表おもて向むかより縁えん後あとを度たぎらぬ事ことい  
 是これより菴いん孫まご孫まごの密ひそか玉たま事ことい  
 して弟あにの夜よ事ことめりて微ひそかして申まをのん弟あに方かたもは夜よ事ことい  
 流ながる隠ひそ密ひそ客かくして人ひと知しるれどと約やく束むすして度たぎらぬ事ことい

懐なつ中ちゆうして也や倚よあいの申まをのん菴いん孫まご孫まごの度たぎらぬ事ことい  
 知しるれど晋しん七しち乃な声こゑを今いま日ひ親おや人ひとも申まをのん番ばんの事ことい  
 頼たのむ事ことい  
 申まをのん由よし方かた申まをのん入いれと申まをのん袖そでをいひて申まをのん貞まこと孫まごうの由よし知しるれど何なに者ものか  
 ぞれ頼たのむ方かたは心こころあれど表おもて向むかより縁えん後あとを度たぎらぬ事ことい  
 是これより菴いん孫まご孫まごの密ひそか玉たま事ことい  
 して弟あにの夜よ事ことめりて微ひそかして申まをのん弟あに方かたもは夜よ事ことい  
 流ながる隠ひそ密ひそ客かくして人ひと知しるれどと約やく束むすして度たぎらぬ事ことい



と何知の誰人かと思ひつけぬものあれとお覺悟せざる事よのや備ふるは  
 有まじと毎日を同じくしては直井にまゝ娘麻野高野の病り  
 踏折の故をば接ふ妻の病もさうさうとせしむるをせしむるを  
 通すはま昔かば二季の五事を給れと乳母の小夜が秋のみあり  
 りれ大少怪し朝日宗の家で直井といふ柱の巨倍居られも自之  
 を許されし家柄波小息女つて艶美あるも兼ておれり玉娘其  
 辨むる示かし指指を不食の秘ありけし洋刺の是女方よりこそ  
 以小遊而玉章小珍り身小余り亦かく脱着の身官受給むる下と晋  
 七小存く礼を速報書徳め探し給ふ

牙三四 未開紅の梅

晋七の交ぬくほびの余り取りのもえ散ば直井が居たなり乳母の小夜小  
 夜と五事をとせし番系極へまゝし給おしむるを極少年而しては  
 由命をばし作付られし後をせし交するれはほびしとて事連の  
 由系知いなきこと知行ともは家柄小夜を早々に縁後をせし法給  
 かしと参る言ふ小夜ほび大方ありは是といふも晋七の徹ゆん  
 むれは糸人今も喚かしは嬌しを思はる人先尚座の骨折料ふ  
 れとて包銀を出しはれは晋七押載勿辨ふしおるものよあとも小夜  
 且那先小の改ては礼抱を下さる及ぶ改載しせしもは抱ふは  
 納め下さるるぞしと輝とを小夜晋七小向し改てははれは且那  
 下さるるは是は好めあれどもは寮人の心ぞし返るるとは情神合ふ

止のどけびき退るは返るを麻野ふんてく日頃恋し中思ふはたふ  
 ねを極の方へ要慕ふ宿むふうを肉まきまきしは思ふ事てうり  
 けさ及の近奈人のこのあはれは後にも及びは兼初の上村の糸の毒  
 くて子連はうり事をも思ひをされし後せはれし出るあまうして  
 今こゝ小恋の山路の登り初うりる車の秘うりく鳥ふおまの照をて  
 夕日親風情るり小夜心はなを退却時有りく入れ麻野が歌色  
 半しりも洞しりねをまき返りてを巻返りて世ふも帰しきふんく  
 いろふぞぬふも合はれりて思ひ違りのこのふねを進極小の奈人の近奈を  
 もきとれはあはれりて思ひ違りて思ひ違りて思ひ違りて思ひ違りて  
 も西親の目を思ひ客通して思ひ違りて思ひ違りて思ひ違りて思ひ違りて

井小夜二人が中をゆく結ぶるもの思ひくる也若麻野小利害をと  
 けさゆふ小初て終小玉を思ふを平七をうり送り是より原き  
 恋路とふりて未は小夜がねども未のまの山とえうけくかたね  
 中と物しり系奄系ねを思ひもうけ直井が腰の玉章をひて  
 とり平七がえはりて思の中とみしうりて思の中とみしうりて思の中とみし  
 を争ふいとど思のこゝろていづご一度の道原もふし情の故を考る  
 小島目まりの原路ふは本貞造と服織林かえりて思の故を考る  
 井筒の故を思ひて思ふ貞造を思ひ初め故を思ひ初め故を思ひ初め  
 のゆがしとてたあきま貞造かえりて思の故を考る  
 ふ子取肝要ふりと直夜思ふのこゝろを考り不量思ひ付し貞造と





士まゝのまゝのりるゝわいふちの行来れども昔一々今もあれ帰  
 り来りて是迄のりるゝまゝ孝地もいふ中他女地をせし作下さ  
 れる孝地の面月も余り殺るゝの婢貞造が大切の役目を仕換せし  
 中何れもく却て是を婿ませぬ實仁を及の君の作有難存なりし  
 烟も小夜後中し余亦るゝ貞造が仍来を尋せしふ

身四回

深谷の挑花

菴系ねを謀計をりて二本貞造を思遠させ恋の邪魔を掃ひし  
 心ふる深もく麻野小思いと通ぐり麻野も殺の玉を往來し  
 心のけを書き送るといふも絶て月もさすふれし母の小夜小夜に  
 殺られ小夜も種く心を殺すまといふも元来物望し直井の家たし麻

野を化行とてふも兩親の内誰に附属なく其小夜使りもふくし  
 物とごりるるの謀を考へ麻野がさすといつと山宮のおもふ  
 孝の通しれんより老向そ縁法を去捨いしとさうとさうりれむ  
 さしでふ心もさしねをけぬをばすう余卒謀人を穿撃し直井正  
 ちまかゝ娘を下しかかち入るゝ思ひがけの縁法といふ菴原  
 太学教腕迫衆の中尚時小姓頭取及して威勢並ぶりのふく知行五百  
 石程も傾され不足る身家柄るれども父子も小思愛とあはれり存  
 る金も人より玉とめて碎し古人の催をよび令娘の出世を好むとて  
 不義の富を貪るゝ内家中の法家を去る腕迫衆のまゝとて求む人  
 ふしとこのおの接おめし味人帰して期と告る小夜を不審女を

めい此縁辺小持て故陸有べに謂ふ一え東叶方より好しといふもわ  
 らびとさる子速晋七を呼あけ有りせせま方内流の流結波一ふば表  
 向より婚調をおんと約しぬるが今日直井氏より以の外の返言も多  
 いかの返あるもとすく晋七大不踏ねま何故小や私系う疾と実  
 否をすまやととて並極直井屋安小り乳母の小夜小遊てねと  
 を方より表向小味人来り小自由遠夏ふされやま小すて  
 私菴系様下と一言系おまやふ所人るれも虚言中ておまが  
 武士あう一夜あふ事海やま何卒け返り下されすと發快来  
 りられ小夜えより呉井麻野もけ事一向ずも及び定めてふままど  
 一箇のう言ふて以えれと定由自問く人人と呉井夫の側小り今朝

も娘麻野を眠近流菴系氏より縁辺を希紙取い一と流るる下  
 の自小話すまび以作られ小や女の子母小付のふれ言傳もすせ  
 いと娘が心腹を問さうふて以せもも返るまどき小流渡り親の  
 思ふ候もゆりさびまて菴系氏、眠をの内まを名さる家柄まで嬌子  
 ねをどの武術の達人ふさう一舞がのふ不足も有ま一さ小夜のお後  
 もあく無下小流い一こそ心ねと理りて以流るる心ま遠一すま  
 流思もとりりあれど女の流さ心おの言悪を弄つげ遠る思を思ふ  
 ねぞう一む菴系家柄とい知行もしおづれ舞ふ不足をふれも味  
 人の者余り小文輝く別て後中系我心小叶流思ふ小是ねをさ自この  
 不覚りて流一りのある下りなあくがまをあり好人トまのこ



然一倭臣あれど直井正をま由月足以上の家なるをば一は取を同根  
 たり文学屋より作被ましるればはつと武士を嫁人小親あぶらさ  
 若あるを余り小若軍必嫁人あねねをが自己の不学と察し改志  
 しくとめて呉押五とて此言ふく又りやけり一晋七小若せられ  
 松進正をまが推考乃通り一個け不学をりてつ牙横島殿六といふ若士  
 を考せしゆゆ今直井が名察を感下け上六父文学へ移る者白の縁  
 後中へ人と多きけ有文学へ話一吉日を擇み所医師兼科三哲といふ者  
 を嫁人小親と直井あへ麻野を夢ひふきりつて正をまはす及一若一  
 ふ三哲は嫁人といけるより女を所呉押五とゆくと進めをせしゆふれど  
 か一は心察しきりつども縁流斗り親の心ふも似せぬりのふれど

先尚人正小親合致させしゆふはくは娘まもるも菴原どのいふ小入  
 中へば考一中をくつと返書りつる三哲もけ義を正極をむの作被  
 其由文学屋下すけい人と退出別菴原文学直井が返りの通  
 中へれは夫おほむ某ともも麻野と中へ未親又しゆもふり色書い  
 東十五骨天殺日あもいり日柄よりれ國吉田の扱足がてり父子は  
 して来さし一け家宣中へ玉しんと日限を定め程よく十みるにぬ  
 菴原父子は彼三哲門下して朝疾より以耐がど用意して國吉田  
 て親り直井あもい兼りつりふを晴と衣おままで更お調ふどしと申  
 くも直井より娘麻野母呉押五乳母の小夜小下僕を人百員かくして  
 城下より東へつりきり余りしてを以檢の

花盛りも 群集一もふりり 幸いけしとて 又合せんとも 双方は  
 の茶店小体見巻系父子のすし 小務る麻野が 爲る度さ 彼か  
 有まどさ 美鳥ありと ねびん 居りーが 麻野の 悪人ねを 孫を  
 来りつと 四の方見候して 居りー 小味人 兼科 三哲四方の 茶店  
 来りー 今日日 栢も 宜敷 宜敷 宜敷 宜敷 宜敷 宜敷 宜敷 宜敷  
 ひとと 小前 持重 取りしと 巻系 氏より の 進物 するとして 是出 則 舞 君  
 ねを 進様と 向るる 茶店 の 左 小 居 居 右 小 居 居 親 古 太 子 孫 小 居 居  
 持重 一なるを 呉味も 小夜も 初より 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる  
 色 清 道 一なる 男 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる  
 小 麻 野 一 去 年 の 其 阿 野 川 一 なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる  
 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる

乳母小向の 巻係が 悪一と 思ふねを 孫の 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる  
 孫ねを 進様 取りしと 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる 一なる  
 疾一 孫とて 小前 重の ね 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫  
 三哲 大 小 孫  
 孫  
 や 唯 一 孫  
 孫  
 今 一 孫  
 孫  
 三 哲 一 孫



て忽憤遂して此縁に某方より強らるるにほつて彼方を辱し  
 彼方より来りし事あるに然るを謂ふに小親人の面おもひ私  
 原をよられ武士の分立ちし以上皆七小逢て車の実否を以て直  
 井心を丈夫小逢て娘を黄信人と憤怒つ皆七を呼ぶ人合の格子  
 具小逢何由斯く傷りを構(我小親原をよせしを養系父子は  
 えかじと元来強気の松進十分小怒り立しまたあれは皆七に怒る人合  
 私傷りをよせしつてはかやりの涙ありと直井が乳母小親を以て故実  
 と五千両もあつた程と看するといども又小逢入るべき光系人合  
 此のそとてりり

景小説打出演巻之壹終



